

## 子どもの即興的表現活動の相互性について\*

### — 音楽と身体の自発的表現活動を通して —

井 中 あけみ  
高 橋 うらら\*\*

#### I はじめに

これまで筆者は、子どもたちの主体性を育む表現の環境を豊かにするため、幼児期の「音楽」と「身体」の自発的表現活動に視点を置き研究を行ってきた。本論は、さらにそれら自発的表現活動における子どもたちの音楽表現と身体表現の相互性に着目し、実践・調査を行ったものである。

これまでの研究からは、子どもたちの自発的活動への取り組みに対して、その保育環境を設定していく保育者自身の自発的活動経験や理解が必要であることが調査からわかってきている。そのため筆者はこれまで保育者同士の即興的音楽表現活動と即興的身体表現活動についても実践・調査してきた。そこから保育者たちが確認したことは、保育者同士の活動を通し、自分自身の自由な表現への気づきや環境への関わり方、さらに保育者同士の関係形成や、相互性のある表現から共有性の創発など、多くの気づきであった<sup>1)</sup>。また、前回の実践・調査では、保育者の即興的演奏活動と子どもたちの即興的身体表現活動において、「保育者が演奏の流れを表現していくと、子どもたちは楽器の方を見つめ、動きの流れを見せていた。つまり音をしっかりと聴いていて、それを自分の体で表現しようとしているのだと感じた。さらに、回数を重ねると、子どもの動きが自分なりに変化していくことが興味深く、保育者の音の表現を周りの子どもたち同士で共同する動きや、それを真逆に表現する動きがみられた。<sup>2)</sup>」などの保育者の感想を得ている。さらに保育者もその子どもたちの動きを受け止めることにより、自分なりの音を表現するなど、保育者自身の即興的演奏への不安も自信に繋がったと述べている。また事後、子どもたちからも「もっとやりたい！」という声が多く採取されていた。そこで、今回は子ども同士による身体と音楽の即興的表現活動を実践し、その相互作用に着目した自発的表現活動の調査を行うこととした。

これまで約10年間筆者が行ってきた「音楽」や「身体」における子どもたちの自発的表現

※ 本論は、2023年5月14日(日)の第76回日本保育学会にて、ポスター発表(オンライン)で行った「音楽と身体による即興的表現活動の相互性について—子どもたちの自発的表現活動を通して—」のデータを基に加筆したものである。

※※東京都市大学 人間科学部人間科学科 准教授

1) 井中あけみ 高橋うらら 朝元 尊 著 「創造的表現活動の実践について—保育者による音楽と身体の即興的表現活動から—」第74回日本保育学会ポスター発表 2021年5月

2) 井中あけみ 高橋うらら 朝元 尊 著 「創造的表現活動の実践について(2)—保育者の音楽的アプローチは子どもの創造的身体表現を引き出すか—」第75回日本保育学会ポスター発表 2022年5月

活動研究調査からは、保育者たちにとって「既成の作品の表現」は必要であり、子どもたちがそれを楽しみながら表現すること、そして技術的に成長できるための保育者の指導が主となっていくことも取り上げられてきた。例えば、身体活動は、「曲の歌詞を理解できる振付けをする」、「動画（YouTube）などにあげられている振付けをそのまま子どもに覚えさせ確実な活動ができるようにする」など、完成されている動きを記憶して、子どもたちが統一された表現を行えるような活動をする。また、音楽については、鼓笛隊活動などでの「既存の合奏譜を使用し楽器の演奏力を高めていく」ことや、園の発表会などにおける「歌詞に沿った言葉への振付けをした合唱をする」など、保育者側から提示した表現を子どもが再現することから、技術力を向上させるといった活動を行うことなどである。そしてこれらの「既成の作品の表現活動」は、集団における協同的活動経験から、協調性の成長を期待することもできよう。しかしながら、これらの活動は、既存のものを取り上げていることで、最終的には子どもの技術的バランスを考えた演奏や動きが中心となっていくことも避けられないことであると思われる。

このような楽器演奏（合奏など）に、特に重点を置いた表現教育を行う保育園・幼稚園・こども園は、発表会といったものへの取り組みを重視し、子ども同士の演奏レベルを高めることから、子どもの成長を見出していくことを目的としているともいえる。しかし、その活動が終了すると楽器は別室に保管されることは当たり前の事実であろう。これらについては、伝統的な表現のスタイルを優先した表現活動傾向にあるものと考えられ、「主体性を重んじる」という音楽や身体の自発的表現活動への取り組みには値しないものともいえよう。楽器は、自由あそびの中で楽器と触れ合い、自発的な音を発したり、感受したりする環境のなかで、子どもの自由な探求から多くのことを感じ学ぼうとしていくことが期待できるものである。吉永<sup>3)</sup>は、これらの体験について、「自由な遊びのなかに楽器を手に取り、思いのままに音を出してみようとする子どもがいれば、その音に誘われるように子どもたちが集まってくる。そうなれば、自然と「合奏」が始まることだろう。」と述べている。これらのことは、子どもの主体性への成長に繋がることは十分に期待できるものと思われる。また、筆者のこれまでの子どもの自発的身体表現活動調査からも同様の傾向が観察、記録されてきた。そこで今回は、子ども同士で行う自由な演奏と自由な身体の動きを伴った自発的表現活動から、相互性を持った表現活動を見出すことにより、さらに表現方法の多様性を追求していくことができるものと考えている。

## II 研究目的

今回の調査の即興的音楽表現活動については、子どもたちの楽器に対する感覚として「音楽を奏でるという演奏への固定概念を持っていない子どもたち」、また「楽器の演奏技術を認知する以前の子どもが、多数いる」ということが、事前に保育者より報告された。さらに即興的身体表現活動についても、身体表現技術を専門的に表現することへの経験者は数

3) 吉永早苗著 無藤隆監修『子どもの音感受の世界－心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探求－』  
萌文書林 2016年 p.214 所収

少ないことも報告されていた。これらのことより、この時期の子どもたちの周囲に存在する多様な動きや互いの働きかけについて、子どもの自発的な音楽と身体の動きの相互作用に焦点を置き、子どもの自由な表現活動を実践調査していくこととした。幼児の未分化な時期であるからこそ実践できるであろう「音楽」と「身体」の即興的表現を行い、これらの相互性によって引き出される子どもの表現から、子どもたち同士で作り上げていく主体的表現に繋がっていく活動を目的とするものである。

吉田<sup>4)</sup>は、保育環境論について、「相互過程的・相互行為的な「場」を構成する作業に子ども自身が関わるのが、子どもが「場」に参加するということであり、「場」への参与と、参与の仕方の変容は、その子どもにとっては「発達」の体験そのものを意味する」と述べている。さらに、「環境との「関わり」というのが、「動き」の連鎖であるということ、動的な過程だということである。—中略—環境が動くというのは、人が動かすということでもあるが、同時に、人が動くことで、人と環境との位置関係が相対的に変わるということも含む。」<sup>5)</sup>としている。

吉永<sup>6)</sup>は、「子どもの遊びは、「視覚による知覚が関係するもの」と「聴覚による知覚が関係するもの」とに大別されるが、後者、すなわち「響きの持つアフォード」は、子どもの前音楽的表現を引き出すものである。」と述べている。このような観点は、保育における音環境が、体の動きに合わせて音が響くことやリズムカルに動くことの楽しさを経験することにより、身体と音楽の表現を介して子どもたちの感性的出会いを発見すること、またその気付きにより子どもたち同士で主体性を育てていくことへのきっかけとなるものを探索していくことでもある。

そこで今回は、「環境」と「人」について、表現の方法論でもある「音楽」と「身体」の活動をそれぞれに当てはめ、子ども同士での環境としての「場」の作り方とそれに対する自身の動きから、その相互作用がある自発的活動を発見するための調査をしていくこととした。

### Ⅲ 調査方法

これまで調査を依頼したJ幼稚園では、過去3回(2019年～2021年)、保育者への即興的表現活動の実践・調査を行ってきた。しかし、保育者の経験年数により、即興的表現活動への参加回数の違いなどがあるため、全ての保育者が今回の子どもたちの自発的表現活動について理解、共有を得るため、この調査の前に、保育者自身の自発的表現活動を経験する必要があると判断し(1)の保育者同士による即興的表現活動を行った。その後それらの経験を活用し、(2)の保育者(ファシリテーター)と子どもたち同士による即興的演奏活動と即興的身体表現活動の調査を実践した。

#### (1) 保育者同士の即興的演奏活動と即興的身体表現活動

---

4) 吉田直哉著「無藤隆による生態学的発達環境論における自己」『日本音楽教育学会大会 研究発表要綱80巻』p.191所収  
一般社団法人 音楽教育学会 2021年8月16日

5) 同上

6) 吉永 無藤 前掲書 p.213 所収

## (2) 保育者（ファシリテーター）と子どもたち同士による即興的演奏活動と即興的身体表現活動

(1) の保育者自身の主体的活動経験を実施することは、子どもの主体的活動への創造性を掻き立てながら、新しい表現遊びを子どもと共に発見し、子どもの表現を深めていくことに繋がるものと考えため、保育者同士の活動を実践した。吉永<sup>7)</sup>もこれら保育者の主体性を重視した子どもたちとの楽器活動観察を行っている。

### Ⅲ-1. (1) 保育者同士の即興的演奏活動と即興的身体表現活動

[調査日時] 2022年9月2日 15時より16時

[調査園] 静岡県内のJ幼稚園

[被験者] 保育者9名

[内 容] 身体表現活動と音楽表現活動を通して即興的で自由な表現活動を行うことで、「模倣・反発・共有・応用」などの相互作用から個々の表現を深めていく創造的表現活動を体験する。

[活動方法]

#### ①身体活動でのウォーミングアップ

即興的身体表現活動に対しての表現への理解を深めるため、ファシリテーター高橋（身体表現熟練者）と保育者全員で身体活動を実践した（約10分間）。ここでは、村田の「4つのくずし」<sup>8)</sup>を使用し、ウォーミングアップとして即興的身体表現を行うこととした。保育者への既成の動きを提示するなどの誤解が生じることがないように、以下の㊦～㊨までの内容を（敢えて保育者への説明はしない）、自由な表現として高橋がファシリテートし、個々の保育者の動きや、保育者同士の共有をしながらの動きへのきっかけを誘導する「4つのくずし」を参考として実践を行った。

㊦方向の変化㊧場の使い方の変化㊨ねじる㊩回る㊪跳ぶ㊫素早い㊬ゆっくり㊭急に止めて  
㊮離れたり、くっついたり、反対にしたり㊯潜り抜けたり、リフトしたり、1人ではできない動き

#### ②即興的音楽表現活動

保育者同士による即興的音楽表現活動を、2つのグループ（保育者Aグループ4名、保育者Bグループ5名）に分け、以下の順序で実践した。

1. 各グループ（AとB）で、演奏のためのテーマを決めるディスカッションを行う
2. 「テーマ」決定後、楽器の選択と打ち合わせ（10分程度）をする

この②の即興的音楽表現活動は、演奏に対して活用するための参考項目を①から⑩まで提案することとした。これらを提起する理由として、保育者の年齢や経験的に、音楽の演奏については、メロディーがあることが潜在的意識であり、簡易楽器のみで音を表現していくことに戸惑いを持ってしまふことを避けるためのものである。

①音色 ②リズム ③速度 ④強弱 ⑤リズムの流れ ⑥音の重なり（音と音を共有したり、

7) 吉永早苗著『子どもの活動が広がる・深まる保育内容「表現」』中央法規出版 2022年 pp.18-20 所収

8) 村田芳子著「リズムから表現へー2つの入り方・4つのくずしー」『女子体育 第51巻 7・8月号』社団法人日本女子体育連盟 2009年 pp.24-25 所収

混じらせたりする) ⑦他者の音との問いや答え ⑧音が反復する ⑨音が縦に鳴ったりと横に流れたりの関係 ⑩イメージの変化(一貫した統一感だけでなく、突然に音色、速度、強弱など変化させる)

### 3. おおよその練習をする(5分程度)

### 4. 各グループの表現活動実践調査

[演奏所要時間] 各グループ1分30秒程度

- ・ Aグループが即興的音楽表現を行う(表現の環境構成としての情報源) ➡ Bグループは即興的身体表現を行う
- ・ Bグループが即興的音楽表現を行う(表現の環境構成としての情報源) ➡ Aグループは即興的身体表現を行う

<選択する楽器>

ピアノ・小太鼓・大太鼓・鈴・シンバル・ウッドブロック・ウインドバーチャイム・オーシャンドラム・カバサ・木琴

### 5. 保育者への事後アンケート調査(自由記述)

- ・ 総合的感想として、表現において「自由に心を開放する活動」として自分を表現することができた。
- ・ 音楽、身体の両者を体験できたことで、先生たちの違った表現の種類が発見できて楽しさが増した。
- ・ 表現の正解がないことへのプラス効果は子どもにはさらに充実感が得られるのではないか。
- ・ 音楽をきっかけに、身体活動をするの方が動きやすさがあった。
- ・ 身体の動きに合わせようとする音の変化に向上心を持って動くことができた。
- ・ 身体の動きを共有し合う、反した動きを考えたいなど、多様性を感じた。
- ・ 即興的演奏なんてできない!(経験初回の保育者)と思っていたが、身体を動かす保育者をみていたら、自然と演奏することができていった。
- ・ 身体活動を最初に行ったこと(ウォーミングアップ)で、自発的な動きに対しての恐怖感や戸惑いを持たずに即興的演奏をすることができた。

これらの保育者の声は、身体と音楽の互いの動きから影響を受けながら活動できたことや、その相互作用から自発的な表現活動に対しての違和感や不安をかなり軽減することができたことが確認できたといえよう。

## Ⅲ-2. (2) 保育者(ファシリテーター)と子どもたち同士による即興的演奏活動と即興的身体活動

[調査日時] 2022年12月15日

[調査園] 静岡県内のJ幼稚園

[被験者] 年長児3クラス、年中児3クラス

<実践方法>

1つのクラスを二つのチーム(AとB)に分けるが、人数の規定はない(子ども自身が自発的表現を可能とするものを選択する)。また担任保育者(それぞれのクラスに2名)は、

それぞれのチームに1名ずつファシリテーターとして参加する。

A：身体の即興的活動を行いたいと思う子ども

B：演奏の即興的活動を行いたいと思う子ども

<活動内容>

Aチーム：即興的身体活動を行う（環境構成としての情報源）

➡Bチーム：動きを見て演奏活動を行う

Bチーム：即興的演奏活動を行う（環境構成としての情報源）

➡Aチーム：演奏を聴いて身体活動を行う

A、B両チームの活動をするため、それぞれのテーマについては、子どもたちの話し合いで決定していく。

また、演奏活動時間・身体活動時間は、1分前後とし、活動回数は2回実施する（即興であるため同一のものでなくてもよいとする）。簡易楽器の演奏方法については、事前の保育の中で説明を行い、楽器への興味などを持たせ、活動の際の子どもたち同士の話し合いで、楽器を選択し合っていくこととした。

<選択する楽器>

タンプリン・すず・フレクサトーン・ウィンドチャイム・カバサ・オーシャンドラム・トライアングル・大太鼓・シンバル・ウッドブロック・ヴィブラスラップ・クラベス・木琴・鉄琴・ピアノ

<記録方法>

子どもたちがどのような身体表現や音楽表現を行うかを、ビデオ（携帯等）撮影にて記録し、子どもたちの個々の表現や、子ども同士の表現のやり取りを保育者が事後に記述する。

また、個人情報について、子どもの顔写真掲載への許可や、氏名を掲載しないことを保護者に確認を得ている。

#### IV 調査記録について

J 幼稚園での子どもたち同士による即興的表現活動は、年長児3クラス、年中児3クラスで実施した。その活動について、本論では年長児1クラス、年中児1クラスの調査を取り上げることとする。

[年中児]

①Aチーム：15名（男子10名、女子5名）即興的身体活動表現 <テーマ>「海の生き物」

Aチーム：即興的身体活動を行う➡Bチームが、Aチームの動きを見て演奏活動を行う

子どもたちの身体表現についての観察結果（動画観察）として、この「海の生き物」の身体活動は、ファシリテーターとしての保育者の動きを主としながら始まった。その後子どもの自分なりの身体表現する姿が徐々に増加していき、最終的には殆んどの子どもの意思が見られる自発的動きが表現されていった。さらに、身体活動から発信される表現に対し、Bチームの子どもたちの、リズムや音の種類の選択、音の鳴らし方、曲に対するエンディングの表現などを、身体表現と共有しようとする音楽表現活動の子どもたちの視線を確認するこ

ともできていた。

[Aチームの動き⇒Bチームの動きの例]

- ・数人の子どもが大きくジャンプする⇒大太鼓の音が鳴っていた
- ・細やかな動きを多くの子どもが行う
  - ⇒ウインドチャイムやタンブリンの連打が演奏されていた  
(横に振って音を出す, 何人かでアンサンブル的に演奏する等)
- ・徐々に集団でのほふく前進に変化し動きのマックスを迎える
  - ⇒全ての楽器が加担されていく演奏が行われていった (徐々に楽器の音量を変化させる, 演奏者の数の変化等)
- ・動きを徐々に静し演奏を聴こう (視覚的にも) とする子どもの姿
  - ⇒演奏者は, 身体表現の静かな動きへの変化の様子を見て, 演奏を終了させていくことを全員が共有した

②Bチーム: 12名 (男子2名, 女子10名) 即興的演奏活動 <テーマ> 「様々な動物」

Bチーム: 即興的演奏活動を行う⇒Aチームが, Bチームの演奏を聴いて身体活動を行う子どもたちの即興的演奏活動についての観察結果 (動画観察) として, ここでの子どもたちの演奏は, 自分の演奏ではなく, 周りからの音を重視していた. さらに身体を動かす子どもたちの表現から, より具体的に演奏に影響力を及ぼし, 予想できる動物の動き方を多様に表現する演奏 (叩き方の変化, リズム等) があった.

[Bチームの動き⇒Aチームの動きの例]

- ・音を止める⇒身体が止まる, 床に伏せる 等
- ・音を連打する
  - ⇒回転, 手首を振り回す, 手を繋いで相手を回す, それぞれの身体を重ねて立体化する 等
- ・静かな演奏の中に別の楽器音をいれていく⇒集団の中を遮って走る子が数名いた 等
- ・強いスタカートと弱いスタカートを交互に入れる
  - ⇒ジャンプの高さの違いを表現する 集まって動きながらそこから抜け出していく 等

[保育者の総合的感想アンケート記録]

- ・楽器の演奏は, 個々が伸び伸びと音を鳴らすことに楽しさがみられ, 日頃曲を演奏したりすることとは違い, 友達がそれに動きを付けていることに, 喜びの笑顔などがみられた.
- ・ピアノを始めて弾いた子どもたちは, 様々な「海の生き物」に楽しんで音を出していることが感じられた. また楽器の音を鳴らしている子どもたちの演奏の動きに対して, 海の生き物の身体表現活動をする子どもたちから「あの楽器も演奏したい」「鳴らしたい!」などの子どもの心情が活動後に聴こえた. 子どもの気持ちを素直に引き出す演奏活動であった.
- ・ピアノを習っている子どもが自分が現在練習している曲を弾いており, 表現が始まったら周りのことを全く意識していなかったことには不快感があった (周りへは無意識で, 自分の演奏に集中していた).
- ・聴こえてきた音に身体が反応することの方が, 自然な表現となっていたように感じており,

止まっている子が「何の音？どんな音？」と考えている姿や、友達と集団を作って、徐々に動きを広げて生き物の集団などを表現する姿など、音の刺激から表現の幅を大きくしていくことはとても特徴的であった。

[年長児]

①Aチーム：9名（男子5名，女子4名）即興的身体活動 <テーマ>「春の野原」

Aチーム：即興的身体活動を行う⇒Bチームは，Aチームの動きを見て演奏活動を行う

年長児Aチームの即興的身体活動については，ファシリテーターである保育者の動きに感化されるのではなく，子ども同士の表現の影響の方が大きく，模倣としての同じ動きのなかでも，さらに独自性を表現しようとする姿が多くみられた。

[Aチームの動き⇒Bチームの動きの例]

- ・円になっているグループがいくつか出てくると  
⇒リズムの連続タンタタタなど工夫した演奏となっていた
- ・軽やかに歩く⇒軽く演奏するという楽器が増えていった
- ・上下の身体の動き⇒ピアノの音で音階が上がったり下がったりという演奏となった
- ・集団の中から飛び出す子どもがいると⇒それを見て，タンブリンなどが音をアクセント的に強調していた
- ・野原でフワフワと歩いている様子  
⇒ウッドブロックを演奏する子が別の楽器（トライアングル等）をゆらして鳴らすなど，自分が担当する楽器以外に触れ，身体活動からイメージする音を探し求める姿があった

②Bチーム：15名（男子7名，女子8名）即興的演奏活動 <テーマ>「夜の世界」

Bチーム：即興的演奏活動を行う⇒Aチームは，Bチームの演奏を聴いて身体活動を行う

年長児Bチームは，Aチームの身体の動きを見て演奏表現した時に比べると，演奏するという主張が強くあり，高音低音の違いで表現したり，強弱をつけて夜の暗さを表現するための恐怖的な音や，快感から不快的な音を，周りと共有して演奏したりするなど，音の変化を自ら表現する子が多かった。また，Aチームの身体活動については，音をきっかけとすることから，動きの感情表現などが多くみられた。

[Bチームの動き⇒Aチームの動きの例]

- ・大太鼓の響きを強調する⇒円を描き全体的な大きさを作っていた
- ・鈴の音で静けさを演奏⇒座禅をしたり，保育者にしがみついたりなど自分の孤独感を表した
- ・低音の響きを木琴が演奏⇒体を下方に向けノラリクラリと動いていた 等

[保育者の総合的感想アンケート記録]

- ・身体活動の子どもたちは，個々の楽器の音に反応する動きが様々であった。大太鼓の音を聴いて，幽霊の動きを表現している様子や，固まっておばけがジャンプしたりなどもあった。

- ・鈴などの何人かの音色が鳴っていることに対して、小集団で手を繋いで、一緒に回ること  
で大きな動きに変化し、表現する姿も理解できた。また、硬い音がしたところは、石のよ  
うに体が固まって、リズムが刻まれる度に起き上がるなどの表現も魅力的であった。
- ・原っぱに大の字になって寝転んだだけではなく、虫を採ろうとする動きなども見られ、子  
どもの具体的な表現が発見できたところもあった。その動きに対して個人的に音を鳴らし  
始めた子がいたため、説明のない身体表現を汲み取り、それを音でも表現することができ  
るということを発見した。
- ・身体表現を見ながら、さらに即興演奏を深める子どもたちの中には、円を描いて回る様子  
を見て、それに対するリズムを作り、それを同じ楽器の子どもたちも合わせて演奏しよう  
とする行為がみられた。演奏途中に目で理解し合う様子は、これまでの活動の中で初めて  
発見したものであった。

上記の下線の部分については、前回（2021年の研究調査）の保育者同士の即興的演奏活動でも同様の感想がいくつか確認できている。子どもたちの自発的活動に対し、保育者が子どもと共有できる目線であったことがこれらの感想から発見できた。また子どもたち同士で相乗的に表現活動していることについては、保育者であるから気付くことができたであろうことも推測できる。これらのことから、今回の子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」に繋がる音楽・身体の自発的表現活動は、子ども同士で相互性を持って発展させていくことができるものであったと考えられる。

## V 結果

### 1. 年中児の子どもの動きについて

年中児①の即興的身体活動の一回目の画像を、全体のまとまりとして動きを俯瞰してみると、子どもたちの動きは、全体的に共通している（同じような動き）ように見える。それは、子どもたちが保育者の動きをしっかりと確認し、それと同じような動きを全員でしていることと捉えられよう。しかし、2回目の活動となると、それを自分なりの身体活動へ展開している子どもが増えており、自発的な活動のきっかけを、保育者の動きから感じることもできたともいえよう。また、保育者主体ではなく、子どもたちの演奏表現をきっかけとしながら、その音を自分なりに身体表現していく子どもたちも数名見られた。

それに対して、年中児②の即興的演奏活動の最初は、楽器によって様々な音色や演奏法があることから、個人の判断でしか演奏できないことに不安など感じている姿もあった。しかしそれ以後、視覚から感じる友達の身体活動を自分の楽器の特徴と関与させ、自分なりの演奏表現活動が可能となり、さらに周りの演奏との融合に発展させていく様子も見受けられた。

これらは身体と音楽の表現の相互性を持って、自分の表現を深めるためのきっかけとなっているであろうと捉えることができた。

### 2. 年中児への保育者の気づきについて—保育者のアンケート記録より—

「Aチームの身体活動は、㊦1回目より2回目の方が全体的に個々の自発的動きがあったと

感じた。この年中児については、特に①さらに聴こえてきた音をイメージした表現の方が動きやすいのではないか、と感じた。自分なりに身体を動かすということに対しては、子どもたちがきっかけとなるものを必要としている様子があった」、という保育者の感想があった。



[写真1] (年中児 A チーム一回目の身体活動)

「Bチームの演奏活動は、どの子ども演奏することを楽しんでいる様子がうかがえた。事後「私たち、かわいい音がしたでしょ!!」と保育者に語り掛けており、「様々な動物」として、「どんな音を鳴らせばいいんだろう？」と自分なりに考えて演奏していたことを確認した。また後半は、身体活動の子どもたちの表現を感じることで、周りにない音を創ろうとしている子どもの姿も見られた。」

下線⑦の子どもの身体の動きについては、視覚的には一回目は全体的に統一されていて、動き方としてまとまっており、きれいな見栄えであったとも考えられる。しかし①の下線部分の感想を含め、この保育者は、子どもの主体性に繋がる表現活動についての視点を持って観察していたと推察できる。

これについては、今後の自発性のある創造性を持つての主体的表現活動に、これら保育者から子どもたちへの影響力をもたらすことができるものと考えられる。

### 3. 年長児の子どもの動きについて

年長児①のAチームの身体表現活動については、子ども同士でのコミュニケーションを適応した活動が、多くの場面で確認できている。どちらの方向にどのように動いていくのか、何の生き物になるか、ということ、二人で手を繋いで動きながら表現している。また、動きながら、聴こえてくる音の種類によって表現を変化させ、違う音を聴取して、周りの動き方とは違った集団をすり抜けるなどの表現をする子ども数人いた。各楽器の音色やリズムの違いなどによっても、多様な動きが可能となることを感じている子どももおり、手を繋いだ友達に方向を変える意思などを身体で表現し、互いに伝えあったりする様子もあった。[写真2]

年長児②のBチームの即興的演奏活動の特徴的な例は、即興的演奏活動の子どもたちが身体活動をする友達たちの動きを見ながら、さらに自分が思いつく自発的音楽表現をしようとする姿であった。[写真3]の即興演奏活動をする子どもたちは、個々の楽器の音に影響を受けた身体活動をする相手を選び、その身体の表現を演奏に適応させていく姿を発見した。

また特に一人の大太鼓の演奏者と、一人の身体表現の男児が互いの表現を見せ合い聴き合いながら（[写真4]）、表現のやり取りをしていた場面があった。さらにその後この二人は、周りとの協同的な表現に同調し、演奏と身体活動が一つの輪を作っていくという過程もあった。

#### 4. 保育者の気づきについて

##### —保育者のアンケート記録より—

「子どもたちの音への興味の違いが様々な動きから知ることができた。例えば体が固まってしまう子どもの不安もあったが、自分をいかに表現するかを、自ら考えるという姿であり、音を聴くことから徐々に自分を自由に表現できていくことを確認できている。また、これらの表現に正解はなく、友達の動きから学んだり、そこから自分なりの動きを表現したりする姿がみられたことは、今後の自分への自信が得られることにもなると感じた。例えば、大太鼓と身体活動の互いに表現し合う様子では、子ども同士の会議のようなイメージを持った[写真4]。」

これら保育者の感想は、表現への環境構成の情報源を使用し互いに表現を受容し合うことで、各々の表現力は深まり、子どもの成長に関連する一つの要素であることを期待できるものといえよう。



[写真2]



[写真3]



[写真4]

## VI まとめ

今回の子どもたち同士による即興的表現活動は、音楽と身体での即興的な表現活動をしたことから、子どもたちが他者との表現を互いに深め合い、仲間を意識することで自分なりの表現をさらに発展させていく姿を発見することができた。また、その自分なりは、相手と共有することや、協同することから影響を受けるものでもあり、今回は年齢ごとにそれが発展していたことも確認することができた。

さらに保育者たちのこの活動への経験（過去3回）は、子どもたちの自発的表現活動への理解に影響していたことも確認できた。これは過去の「子どもの自発的表現活動調査」の※保育者の感想から比較すると、個々の子どもの表現への気づきや、主体的な表現への理解が大きく変化していることが明らかとなっている。（※保育者の感想例<sup>9)</sup>「身体などの自由な活動というのは、適当さやただのやりたい放題にしか見えない。自由な表現活動とは自分勝手であり、小学校に入ったらみんなと同じ活動ができなくなるので止めてほしい。」）

今回は、音・動き・感覚などをテーマにした即興的表現活動について、子どもたちによる簡易楽器演奏の自発的表現を初めて取り入れた調査であった。勿論子どもたちの不安を感じる表情や態度も多々見られた。それは、これまで園で経験した演奏活動とは異なった印象が子どもたちにあったためでもあろう。しかし、環境の情報源とした即興的身体表現活動を見ながら自由に音の表現ができる子どもたちを何人が確認できたこと、音色やリズム、音の高低、速度などを環境の情報源とした即興的演奏活動から、身体の活動がさらに豊かにできた子どもがいたことも確認できている。これらは子どもたち自身が、子どもの知覚、聴覚から自発的に気付くことのできた音楽表現と身体表現の相互性であることを確認できる調査であったといえよう。特に、大太鼓演奏に自ら関わりに行った身体活動の子ども〔写真4〕は、音の発生源に近寄り、自らの身体の表現をすることで、環境情報を提供した即興演奏活動者とのやりとりが流動的となり、偶発的ではあるが、新たな自分の表現を生みだし、互いに表現を深め合っていく姿を観察することが出来ている。

今回の調査では、子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」に繋がる表現活動は、既存の作品の表現ではない身体と音楽の自発的表現を通して、自らの身体の動きや、音楽表現について、子ども同士で相互性を持って発展させていくことができる部分を具体的に観察することができた。今後の課題としては、これらの活動内容を自然と保育に活用できる環境作りを明確にしていくこと、さらに多様性のある表現活動への認識も深めていくため、音と身体の自発的表現活動方法の具体性や精緻化に努めていきたい。

<謝辞>ご協力いただきました静岡県J幼稚園の保育者の皆様に深く感謝申し上げます。

9) 井中あけみ 高橋うらら 朝元 尊 著「子どもの自発的表現を引き出す音素材に関する調査」第71回日本保育学会ポスター発表 2018年5月

参考文献

佐々木正人著『アフォーダンス新しい認知の理論』岩波書店 2003年

佐々木正人著『アート/表現する身体』東京大学出版会 2006年

佐々木正人・三嶋博之・宮本英美・鈴木健太郎・黄倉雅広著『アフォーダンスと行為』金子書房 2007年

竹内貞一著「子どもの表現活動における身体性とコミュニケーション—音楽および身体表現の特性の視座から」『東京未来大学研究紀要Vol. 11』pp.131-137 2017年

松下茉莉香・中村礼香・小松恵理子著「子どもの表現活動の効果的指導方法に関する研究—身体表現・音楽表現・造形表現を考慮した総合的表現指導の観点から—」『鹿児島女子短期大学紀要 第54号』pp.81-90 2018年

無藤隆著『幼児教育のデザイン：保育の生態学』東京大学出版会 2013年

吉永早苗著『子どもの活動が広がる・深まる保育内容「表現」』中央法規出版 2022年